

3歩を歩くのではなく、3歩を走れるチームに・・・

8月21日、地区予選3連勝で県大会を決めた。チームは、テンポの速さ、状況の確認、やってきた戦術を実践することに集中している姿があった。無我夢中で3日間、ゲームに集中してきた。結果は3戦ともコールド勝ちだったが、楽な試合は一度もなかった。気を抜いたら、一気に逆転される・・・そんな状態で戦っていたからだ。ただ、やってきたことを実践することに集中すること、一歩踏み出す、勇気をもてた。この夏、努力を積み重ねてきたことが間違っていないと感じることができた大会となった。ただ、勝ったことで何が変わるのか・・・。県大会に出ることで彼らの行動がどう変わっていくのか・・・。

約1ヶ月前にこのチームが始まった。たった1ヶ月だが、振り返れば、随分と長くも感じる。高校生の成長は、やはりすごいと指導者達は話していた。



新チーム結成日、キャプテンは決まらなかった。選手からキャプテンを任せたい者は挙がるが、本人は、覚悟ができない。そんな状況だった。チーム内でもお互いに遠慮をして、言いたいことが出てこない。選手間ミーティングに発展していく気配がまだなかった。「元気がないチーム」「愚痴や文句が多いチーム」「雑用を特定の人だけに任せてしまうチーム」「誰かを責めることばかり言うチーム」「メリハリがないチーム」「応援されないチーム」こんなチームにはなりたくないという意思表示はあった。目標は、勝つチーム。そして、応援されるチームということも一致した。結局その日は、キャプテン候補は3人ほど挙がるが誰もやるとは言わずにチームは解散した。

次の日、監督とキャプテン候補の3人は話し合いをもった。そこで開ロー番、「自分がキャプテンをやります。」キャプテンを任せたいと選手から一番多く、声があがっていた選手だった。本人は、気持ちのコントロールができない時があること。大きな声でみんなを引っ張っていくタイプではないと思っていること。自分が矢面に立つことへの覚悟がなかったこと。そこでどうしても、やりますとは、言えなかった。でも、1日経って、その覚悟ができた。監督のもとにやってきた。彼には自分なりのキャプテンを目指すこと。同時に、他の選手には、キャプテンを任せたい責任を感じる。1人にさせないようにすること。監督からチームにその約束をして、いよいよ新チームが誕生した。内気で何かを成し遂げようとする勇気がもてない。でも、あきらめたくない。俺だって・・・。小さくても、微かな希望を持ちながら、彼らは頑張ろうとしていた。練習がはじまったが、やはり選手の声が届かない。捕球する時、送球する時は名前を呼ぼう。プレーのあとはお互いに目を合わせよう。誰かが大きな声を出したら、反応、返事をしよう。そう言って始めた練習だったが、まだまだだった。そんな中でも一年生の中から声を出そうと引っ張る選手が出てきた。少しずつだが、前のチームから成長している姿が見られてきた。

最初の練習試合は、県大会常連校だった。鍛え上げられたチームだった。行動のスピードも速く、集中する対象もポイントが絞られている。チームとしては相手が、上だった。しかし、善戦できていた。次の試合も強豪私学。同じように試合運びが上手い。個々の能力も高い。だが、ふと気がつくと、彼らも同じように行動のメリハリ、集中する対象を絞り、何とか善戦できていた。試合が終わって、彼らは、相手から学習していくと同時に自分達だって、頑張ればできるかもしれない……。そんな気持ちが上がってきていた。



少しずつだが、行動パターンも変化が出る。技術のある選手が練習に来なかったり、サボってしまう傾向があったチームが、気づけば、練習を休むことなく、彼らなりに頑張ろうとしていた。攻守のスピードや切り替えの速さも少しずつ変わってきている。トレーニングも回数をごまかして、やりきれない選手にも変化が見られるようになってきた。そして、3歩のところを走る姿が多くなった。たった3歩を歩いてしまう。あと少し頑張る。もう少し頑張る……。それが耐えられない。だから、3歩を歩くのではなく、3歩を走ろう。選手の中に響き始めていた。他の選手を励まし、一緒に頑張ろうと励ます姿もある。上級生の自覚と1年生の元気の良さ。チームとして融合しつつあった。ただ、それと同時にやはり、弱さや粗さ、集中力の欠如、ゲームの流れを読めないなどが現れ、コールド負けしてしまうかもしれないという怖さは、まだまだつきまとう。そんな相反する気持ちをもったまま、地区予選を迎えることとなった。その自信と怖さをもつということが、結果として、彼らには良い緊張感となり、丁寧に試合を進めることができ、県大会を1位通過で出場を決めることにつながった。この先、たくさんのことを乗り越えていかなければいけないという不安は大きいですが、もう前の自分には戻りたくない。もう勝つ喜びやチームが繋がるということを感じてしまったからだ。どれだけの壁を超えていくのか、指導者達も期待と不安をもちながらも彼らの見え隠れする志を信頼しながら、その時を待つことにした。

